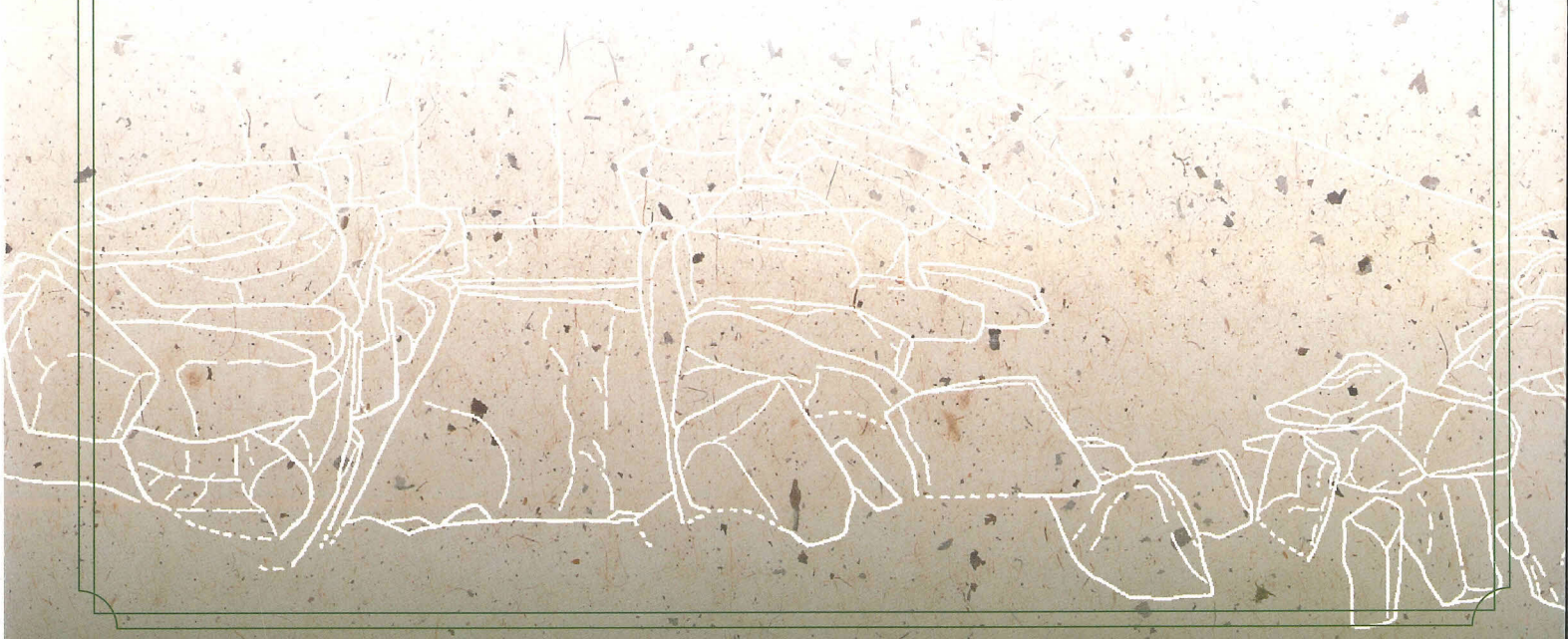
浄土寺古墳群

～敦賀半島周辺の石棚と海の民～

The record of the Johdoji old burial mound group



美浜町・美浜町教育委員会

はじめに

浄土寺古墳群は、6世紀の終わり頃から7世紀の初め頃にかけて造られた海の民の墳墓群（お墓）です。浄土寺古墳群の時代、敦賀半島の津々浦々では土器を用いた塩作り（土器製塩）が活発に行われました。浄土寺古墳群は塩作りを行った人達（土器製塩の集団）の墓域と考えられます。

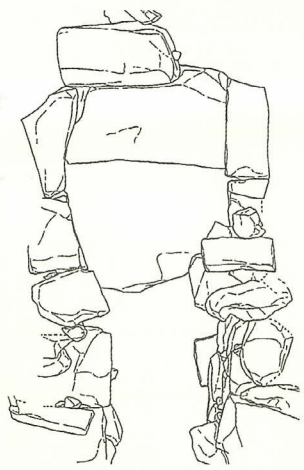
浄土寺古墳群（2号墳・3号墳）の横穴式石室（死者が埋葬された石造りの部屋）には、「石棚」と呼ばれる棚状の施設が設けられました。横穴式石室への石棚の架設は、福井県下では敦賀半島周辺の地域にのみ7世紀初め頃の極めて短期間に認められる現象です。

浄土寺古墳群の調査を振り返りながら、敦賀半島周辺の古墳造りのあり方や、浄土寺古墳群や敦賀半島周辺の古墳（横穴式石室）に石棚が架設された背景などについて考えてみたいと思います。

浄土寺古墳群 発掘調査の風景

目　次

浄土寺古墳群と敦賀半島……1～3
過去の調査……3
浄土寺1号墳の調査……4
浄土寺2号墳・3号墳の墳丘……4～6
浄土寺2号墳・3号墳の横穴式石室……7・8
浄土寺2号墳・3号墳の出土遺物……9・10
浄土寺古墳群の周辺……11
敦賀半島周辺の石棚と海の民……11・12
浄土寺古墳群をめぐって……13・14



●浄土寺2号墳石棚平面図（縮尺1/50）

表紙写真・図：［上］浄土寺2号墳俯瞰写真　［下］浄土寺2号墳正面立面図

浄土寺古墳群と敦賀半島

浄土寺古墳群は、福井県三方郡美浜町丹生に所在します。敦賀半島の主峰をなす蝶螺ケ岳（標高885m）から南西に派生する尾根筋の先端に位置し、眼下に若狭湾や落合川の流れを望みます。

浄土寺古墳群は３基からなる古墳群です。１号墳と２号墳、３号墳はそれぞれ別の尾根に分布します。１号墳が海側の尾根筋の最も標高が下がった山裾に分布することに対して、２号墳、３号墳はその東側の尾根筋上、わずかに谷側に外れて分布しています。

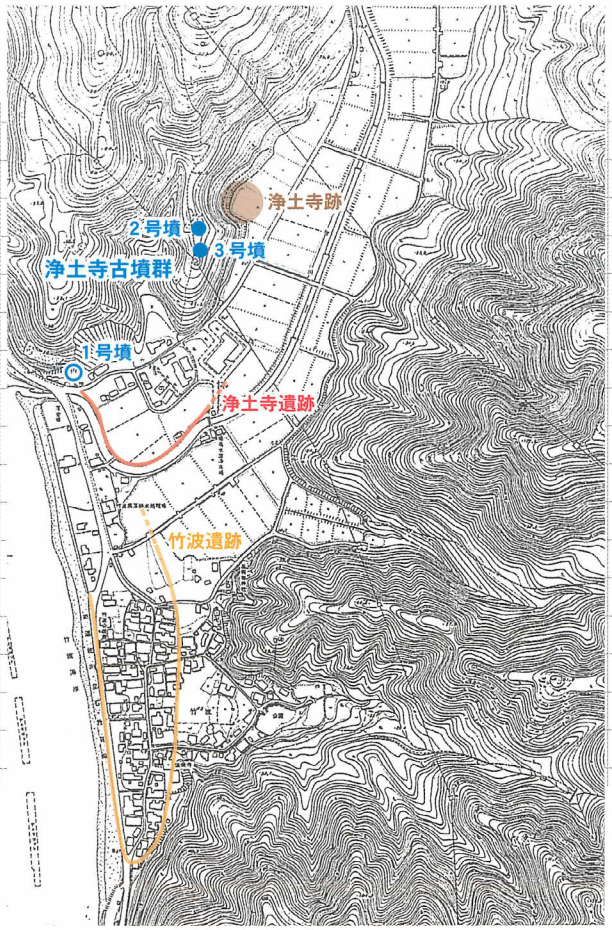
浄土寺古墳群下、落合川河口部の右岸には縄文時代の遺跡、浄土寺遺跡が所在します。過去に縄文前期・中期の縄文土器や石器（石鏃、石棒）などが採集されるなど、本格的な縄文集落が展開していたものと考えられます。集落背後の山麓（浄土寺古墳群内）からも縄文土器、石鏃が出土しており、一体が生活圏内にあったことが窺えます。

佐田古墳群（帝釈寺支群）は、元々は10数基が存在したと思われる古墳群です。敦賀半島西岸の基部に６世紀を通じて造られ、敦賀半島西岸を含む周辺地域を治めた豪族の墳墓群です。４号墳では、これまでの試掘調査で墳丘の周囲を廻る周溝内から人物埴輪（男子像、力士像）の一部とともに多くの円筒埴輪が出土しました。

阿弥陀寺古墳群は、浄土寺古墳群の北方、敦賀半島西岸の先端に、浄土寺古墳群とほぼ同じ時期、６世紀後半から７世紀初め頃に造られた古墳群です。山麓に横穴式石室が開口する４基の円墳が近接して分布しています。

●浄土寺古墳群遠景

●浄土寺遺跡近景



●浄土寺古墳群周辺の遺跡分布（縮尺1/10,000）

●阿弥陀寺古墳群横穴式石室

●佐田古墳群４号墳出土人物埴輪

●敦賀半島西岸の遺跡分布（縮尺1/50,000）

●浄土寺跡石垣

●浄土寺跡五輪塔・宝篋印塔・板碑

浄土寺古墳群など、これらの古墳群が造られた６～７世紀（古墳時代後期）、敦賀半島の浦々では土器製塩（土器を使用した塩作り）が行われました。浄土寺古墳群下では、落合川河口の浜堤（ひんてい）に竹波（たけなみ）遺跡が所在し、土器製塩に用いられた製塩土器が採集されています。これ以外にも、佐田古墳群近辺では下田（しもだ）遺跡、今市（いまいち）遺跡などで、また阿弥陀寺古墳群下、東奥浦（ひがしおくのうら）遺跡でも製塩土器が採集されています。

浄土寺古墳群下の山裾には中世寺院、浄土寺跡が所在します。山裾には寺域を示す石垣が廻り、室町（むろまち）時代まで遡（さかのぼ）る無縫塔（むほうとう）、あるいは中世の五輪塔（ごりんとう）や宝篋印塔（ほうきょういんとう）、板碑（いたび）などが散在（さんざい）します。寺院の中心は現在の水田下に眠っているものと考えられます。

●浄土寺跡無縫塔

過去の調査

1977（昭和52）年、若狭考古学研究会（わかさこうこがくけんきゅうかい）により行われた１号墳、２号墳の発掘調査が浄土寺古墳群における初めての調査です。１号墳では、周辺で行われていた土取り工事のため消滅の危機（きき）にさらされていたことから記録保存を目的として緊急調査が行われました。１号墳の調査時に、既に横穴式石室が開口していた２号墳の記録化を目的とした発掘調査が平行して行われました。

1998～2000（平成10～12）年、美浜町教育委員会が行った分布調査では、２号墳に近接して３号墳が存在することが確認されました。３号墳では既に盗掘を受けており、盗掘抗が開いていました。

●３号墳盗掘抗

浄土寺１号墳の調査

浄土寺１号墳は、調査時には大規模な土取りを受けていたため、古墳の墳形、墳丘の規模ははっきり分かりません。径10m程の円墳であったものと思われます。

古墳の埋葬施設は、南（N2°E）に開口する横穴式石室です。石室の前方、羨道部（石室の通路の部分）は削平を受け失われていました。現存した石室の規模は、全長3.4m、幅1.0m、最大高1.7mです。

石室は、奥壁に鏡石状に１石を立て据え、側壁は目地を揃えながら６段目まで積みます。床面には棺台として人頭大の礫を配します。

石室内から副葬品として土器（須恵器𤭯１点）、武具（鉄鏃１点）、工具（刀子１点）、装身具（管玉１点、棗玉１点）が出土しました。

古墳の年代は、石室の構造や出土遺物の時期から６世紀の終わり頃と考えられます。

この時期の周辺の古墳の石室構造を見ると、敦賀半島東岸に分布する穴地蔵３号墳や尾尻１号墳などよく似た石室が造られています。

残念ながら浄土寺１号墳は調査後、消滅しています。

●１号墳横穴式石室（若狭考古学研究会提供）

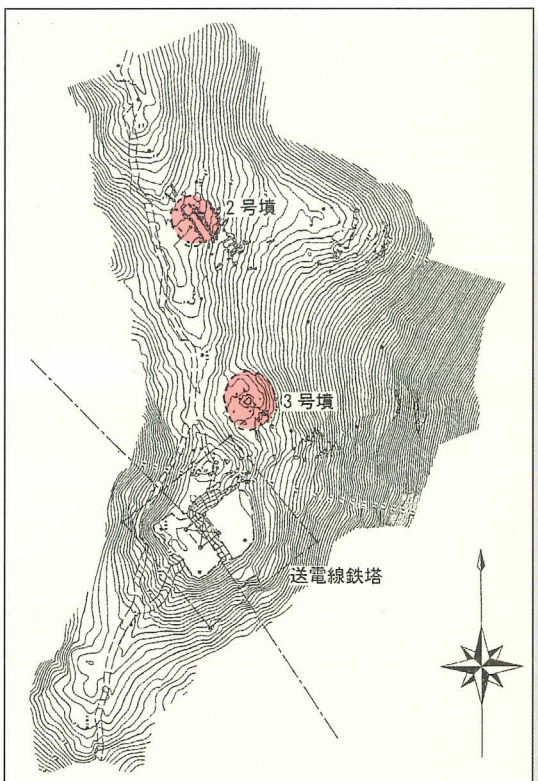
浄土寺２号墳・３号墳の墳丘

古墳の石室を覆うように土が盛り上げられ、墳丘が造られます。２号墳、３号墳の墳形は円墳（上から見ると円形）で、その規模は２号墳が径7.2m、３号墳は径7.6mです。

墳丘前方の裾部には外護列石が見られます。石室の開口部の石積みから連続して外護列石が直線的に左右に延び、さらに谷側では墳丘に沿って円弧状に廻り、墳丘の背後に至ります。墳丘の後方では、山の尾根筋の岩盤を弧状に掘り割ることで墳丘の裾部を造り出しています。

墳丘を観察すると、浄土寺２号墳の外護列石が特に目を引きます。列石の基底石（一番下に据える基礎の石）として大きな石を墳丘に沿って縦方向に据え置き、その上にやや小ぶりな石を横方向に数段積みます。その造り方は古墳石室の側壁とよく似ています。

墳丘の外護列石には、墳丘の土が谷側に流れ出ることを防ぐための土留めとしての役割とともに、古墳を飾り立てる意味合いもあったものと考えられます。浄土寺２号墳の外護列石の構造は、若狭地方の同じ時期の古墳に見られない技法で、他地域か



●２号墳・３号墳分布（縮尺1／1,000）

ら技術や情報が伝わったものと推測（すいそく）されます。

墳丘の観察から２号墳と３号墳とを比較すると、規模、構造ともによく似た造り方をしていますが、３号墳の外護列石が２号墳のそれより簡素化（かんそか）されており、３号墳が２号墳の後に造られたものと考えられます。

●２号墳墳丘

●２号墳墳丘

●２号墳イラスト図

●２号墳墳丘外護列石

●２号墳墳丘背後

●２号墳墳丘背後掘り割り

浄土寺２号墳、３号墳の古墳造りに際しては、尾根筋の斜面を広く削平して大規模に平坦地（へいたんち）を造成（ぞうせい）し、石室、墳丘と外護列石とが平行して造られたことが調査により明らかとなりました。

●３号墳墳丘

●２号墳・３号墳位置関係

●３号墳イラスト図

●３号墳墳丘外護列石

●２号墳墳丘背後

●２号墳墳丘背後掘り割り

浄土寺２号墳・３号墳の横穴式石室

浄土寺２号墳、３号墳の埋葬施設は横穴式石室（追葬（ついそう）を可能とする出入口を持つ石室）です。

石室が開口する方向はともに南東方向で、２号墳がＮ29°Ｅ、３号墳がＮ30°Ｅに開口します。玄室（げんしつ）（死者を埋葬する部分）と羨道部（玄室へとつながる通路の部分）とが分かれる両袖式（りょうそでしき）と呼ばれる石室構造です。

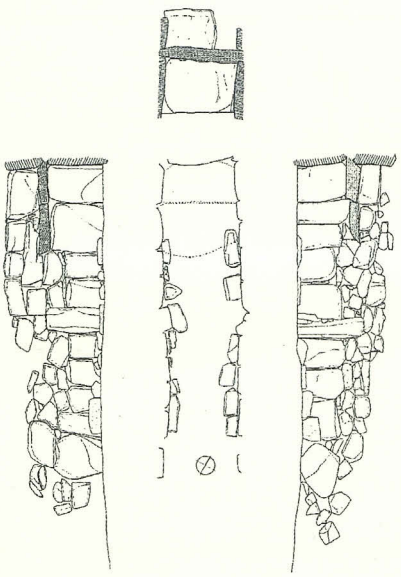
石室の規模は、２号墳が全長5.6m、玄室長2.0m、玄室幅1.1m、玄室高1.5m、羨道部長3.6m、羨道部幅1.1m、羨道部高1.3m、３号墳では全長5.6m、玄室長2.2m、玄室幅1.2m、玄室高1.5m、羨道部長3.4m、羨道部幅1.05m、羨道部高1.4m。

ともに玄室と羨道部との境に高く突出（とっしゅつ）する立柱石（りっちゅうせき）を配することで玄門（げんもん）として意識し、また石室奥壁・側壁はよく似た積み方をするなど、よく似た意図で造られます。

●２号墳横穴式石室

●２号墳横穴式石室石棚

●２号墳横穴式石室玄室右側壁



●２号墳横穴式石室実測図（縮尺1/100）
（畠中1987）

●２号墳横穴式石室玄室左側壁

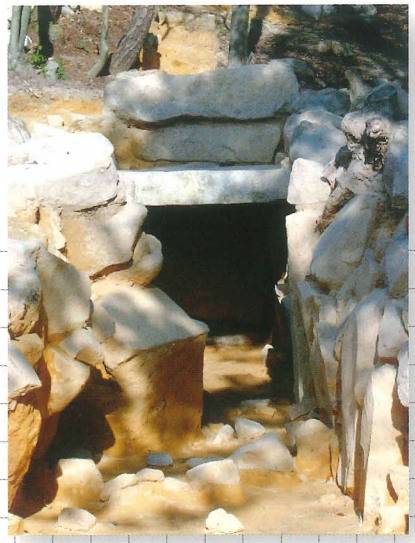
●２号墳横穴式石室羨道部右側壁

●２号墳横穴式石室羨道部左側壁

2号墳と3号墳の横穴式石室を特徴付ける施設に石棚と呼ばれる棚状の施設があります。2石の板石(いたいし)の表面を平滑(へいかつ)に加工し、石室玄室の主軸(しゅじく)方向に並列させ、側壁に組み込ませるように架設します。

石棚の役割には諸説ありますが、浄土寺古墳群の場合、玄室空間の使用が石棚の架設により限定されてしまうことから、玄室の石棚から下の空間を棺(ひつぎ)として意識したことが想定されます。

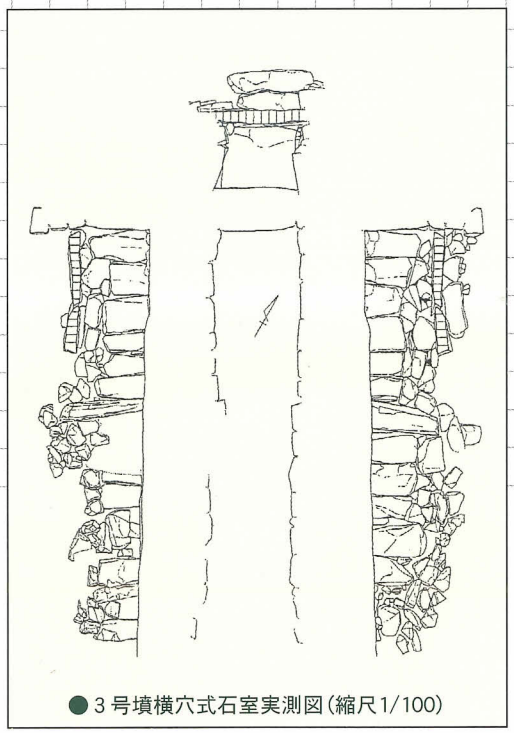
横穴式石室から2号墳と3号墳とを比較すると、規模、構造ともによく似た造り方をしていますが、3号墳の石室の石積みが2号墳のそれと比べて乱雑で、また2号墳が側壁の基底石の上に直接石棚を架設することに対して、3号墳では側壁基底石と石棚との間に小礫(しょうれき)による小口(こぐち)積みを行うなど、墳丘から見た場合と同様、3号墳に退化傾向が見られ、2号墳より後に造られたものと考えられます。



●3号墳横穴式石室

●3号墳横穴式石室石棚

●3号墳横穴式石室玄室右側壁



●3号墳横穴式石室実測図(縮尺1/100)

●3号墳横穴式石室玄室左側壁

●3号墳横穴式石室羨道部右側壁

●3号墳横穴式石室羨道部左側壁

浄土寺２号墳・３号墳の出土遺物

石室内から出土した遺物は、死者が埋葬される際にともに埋納されたものです。

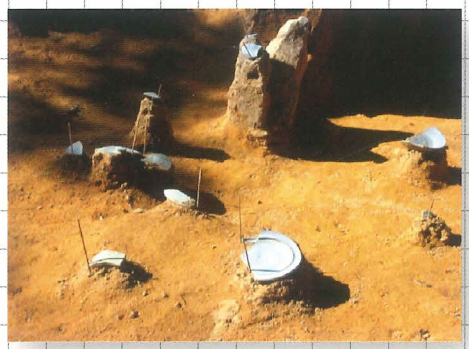
浄土寺２号墳では1977（昭和52）年調査時に横穴式石室羨道部の閉塞石（石室開口部を塞ぐための石積み）下から土器（須恵器杯・杯蓋）数点が、浄土寺３号墳からは横穴式石室の羨道部床面から土器（須恵器杯）２点が出土しています。いずれも７世紀初め頃の土器で、出土状況から判断して追葬時の副葬土器と考えられます。この時期に古墳で追葬が行われ、石室内に持ち込まれたものでしょう。

さらに、３号墳では石室の開口部付近からこれらの土器よりさらに後の時代の土器（須恵器杯２点、杯蓋３点、長頸壺１点、土師器杯１点）が散らばって出土しています。７世紀後半の土器と考えられ、３号墳ではさらに継続的に追葬が行われたようです。

石室内に副葬された土器とは別に、２号墳の墳丘背後から土器（須恵器杯蓋１点、土師器甕１点、製塩土器２点）が、３号墳の墳丘背後からも同様に土器（土師器杯１点）が出土しました。これらの土器は古墳が造営された後に、祭祀（儀礼）のために墳丘上に据え置かれていたものが後に墳丘裾部まで転落したものと考えられます。２号墳から出土した製塩土器は古墳群に埋葬された集団の性格を考える上で示唆的な遺物です。

●３号墳石室羨道部遺物出土状況

●３号墳石室開口部遺物出土状況



●２号墳石室羨道部出土須恵器

●３号墳石室羨道部出土須恵器

●３号墳石室開口部出土須恵器

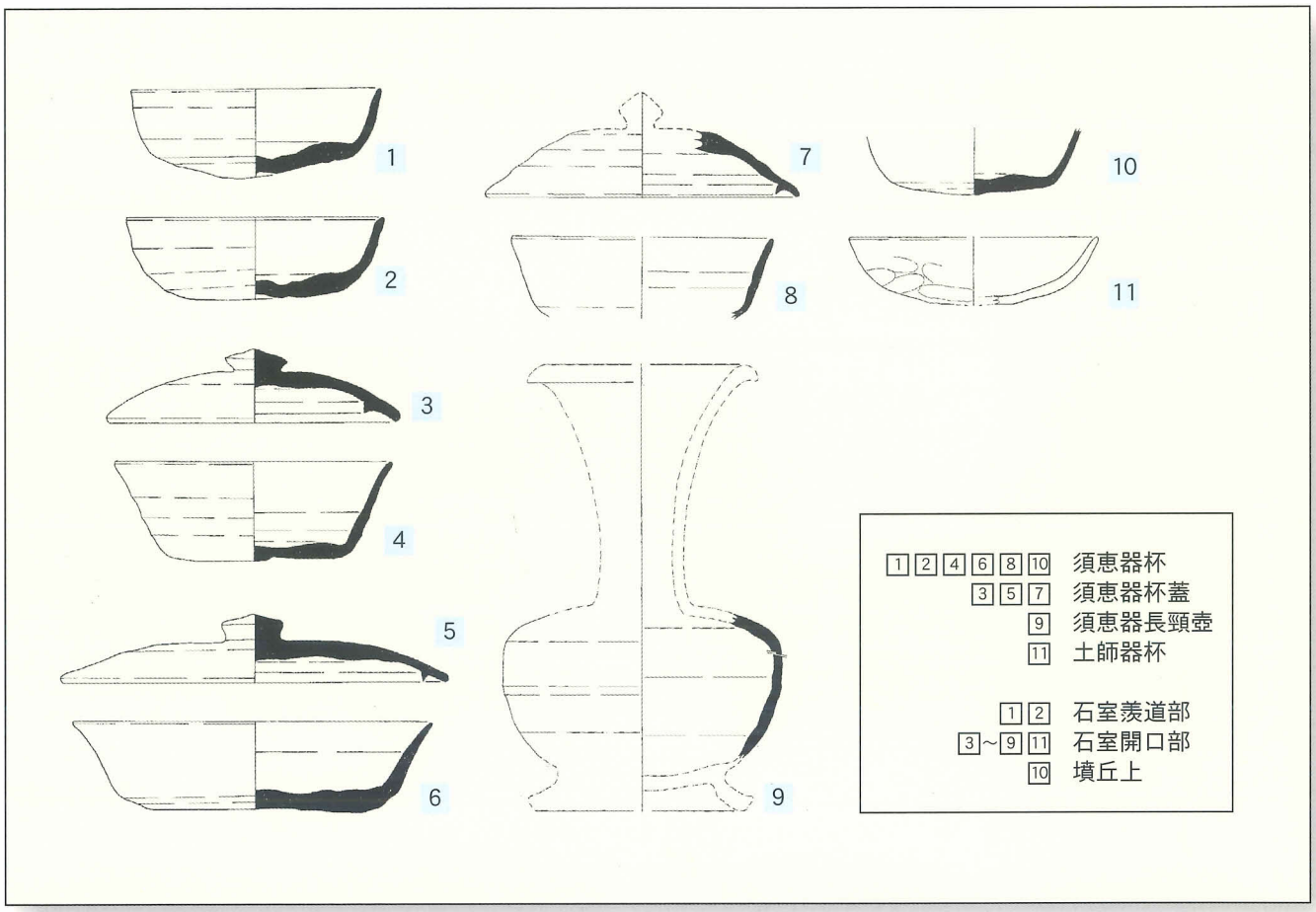
●２号墳墳丘背後遺物出土状況

●２号墳墳丘背後遺物出土状況

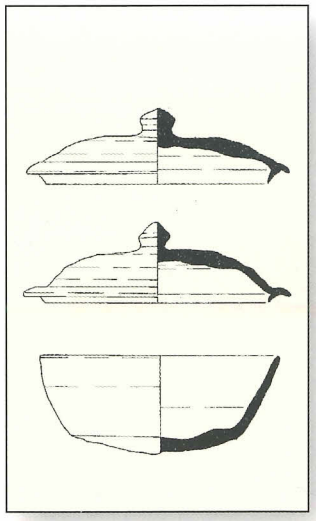
●２号墳墳丘背後出土土師器・製塩土器

●３号墳墳丘背後出土土師器

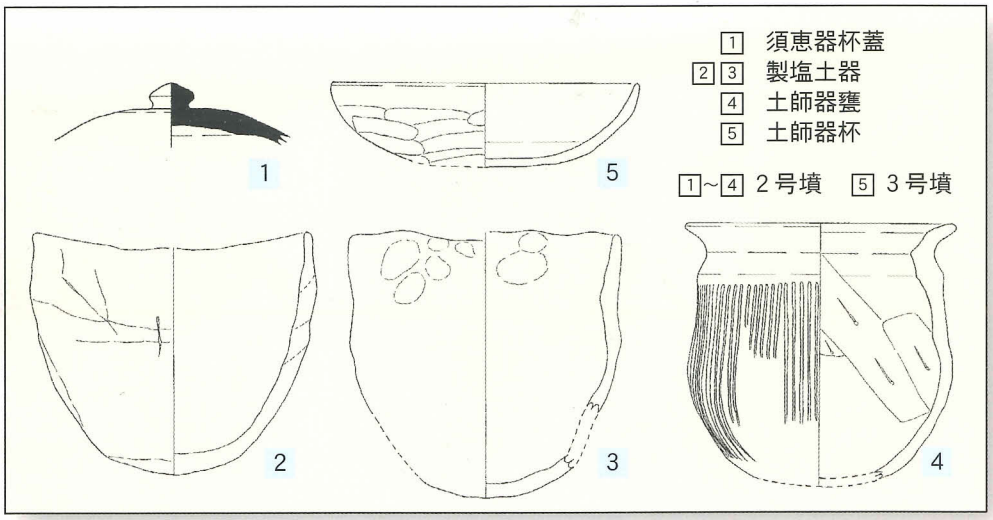
●３号墳石室羨道部・開口部出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/３）



●２号墳石室羨道部出土須恵器実測図（縮尺1/３）



●２号墳・３号墳墳丘背後出土須恵器・土師器・製塩土器実測図（縮尺1/３）



浄土寺古墳群の周辺

浄土寺２号墳、３号墳が所在する支尾根からさらに枝分かれして舌状に派生する小支尾根の先端付近（２号墳の東側）に古墳墳丘状の地形の隆起があり、また墳丘外護列石のような石列が確認されていたことから、トレンチ調査を行いましたが、自然地形であることが分かりました。

しかし、この小支尾根上の平坦部から土器（土師器甕１点）が破砕された状態で出土しました。この土師器甕は一般的に煮炊きのために使用されるものですが、出土状況から見ると土器を据え置いたというよりもむしろ意図的に打ち割り、祭祀（儀礼）を行ったものと考えられます。

●破砕土師器甕

敦賀半島周辺の石棚と海の民

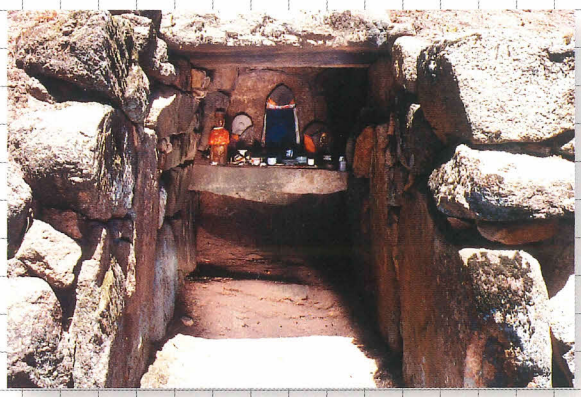
福井県下では、浄土寺２号墳、３号墳と同様に横穴式石室に石棚を架設する事例が敦賀半島周辺に見られます。敦賀半島東岸に所在する穴地蔵１号墳、白塚古墳、そして敦賀平野から近江への抜けるルート上に所在する鳩原２号墳（いずれも敦賀市域）です。

穴地蔵１号墳は３基からなる穴地蔵古墳群の１基で、６世紀終わり頃に造られた３号墳に後続します。推定径約12mの円墳ですが、墳丘、石室ともに後世の地蔵尊祭祀のため前方が削平されています。石室は南東（Ｓ23°Ｅ）に開口する横穴式石室です。現存長5.0m、玄室長3.7m、玄室奥壁幅1.56m、最大高2.0m。石室内から土器（須恵器杯３点、杯蓋３点、短頸壺２点）、鉄製品（馬具２点）が出土しています。

白塚古墳は径10m程の円墳で、南東（Ｓ37°Ｅ）に開口する横穴式石室を持ちます。石室全長6.2m、玄室長2.7m、玄室最大幅1.2mです。石室の構造は浄土寺２号墳と比較的よく似ています。石室内から土器（須恵器杯３点、杯蓋３点）、装身具（耳環１点）が出土し、羨道部からは墓前での祭祀の際に持ち込まれたと思われる土器（須恵器長頸壺１点、土師器杯１点）が出土しています。

●穴地蔵１号墳墳丘（敦賀市教育委員会提供）

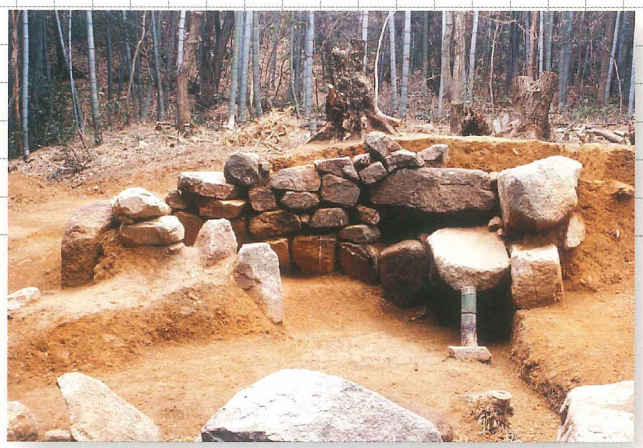
●穴地蔵１号墳横穴式石室（敦賀市教育委員会提供）



●白塚古墳墳丘（敦賀市教育委員会提供）

●白塚古墳横穴式石室（敦賀市教育委員会提供）

●鳩原２号墳墳丘（敦賀市教育委員会提供）



●鳩原２号墳横穴式石室（敦賀市教育委員会提供）

鳩原２号墳は、鳩原１号墳の50m西方に位置する径８ｍの円墳です。南東に開口する石室全長3.5mの横穴式石室を持ちます。

これらの古墳はいずれも板石を石棚として横穴式石室の玄室側壁に架け渡しています。また、浄土寺２号墳、３号墳を含めて、とてもよく似た石室の構造を示しています。

敦賀半島周辺に分布する石棚を持つ古墳に共通して言えることとして、横穴式石室に石棚が架設される前、６世紀の終わり頃の時期に先行して造られた古墳が付近にあり（浄土寺１号墳→浄土寺２号墳・３号墳、穴地蔵３号墳→穴地蔵１号墳、尾尻１号墳→白塚古墳、鳩原１号墳→鳩原２号墳）、それらの古墳はいずれもよく似た構造の横穴式石室を持つことが挙げられます。つまり、６世紀後半の段階には既に敦賀半島の津々浦々を結ぶ海上ルートがあり、土器製塩や古墳造営などについての技術や情報が共有される基盤（きばん）があったことを示しています。

この基盤を背景として、７世紀に入ると穴地蔵１号墳に石棚が架設されたことを契機として、これ以後に敦賀半島周辺で造られた古墳の横穴式石室に石棚を架設することが広がりました。各古墳から出土した土器の年代を見ると、時期を隔（へだ）てずして７世紀初め頃といった極めて短期間に石棚が拡散したことが見て取れます。

また、これらの古墳では古墳が造られた後も幾度か追葬が行われ、７世紀を通じて古墳が墓域として使用されたことが出土した土器やその出土状況から分かります。

浄土寺古墳群をめぐって

古墳にはどのような人達が埋葬されていたのでしょうか。浄土寺古墳群の場合、付近の土器製塩遺跡、竹波遺跡で土器製塩を行った人達が考えられます。そのことを示す遺物が浄土寺２号墳から出土した製塩土器と言えるでしょう。浄土寺古墳群に葬られた人達は、土器製塩の技術のみでなく、漁業や渡航技術にも長けた集団であったものと考えられます。

敦賀半島では６世紀前半の佐田古墳群（美浜町）や６世紀中頃の沓丸山古墳（敦賀市）の造営を契機として、横穴式石室を持つ古墳（群）が津々浦々で造られました。６世紀の終わり頃には、穴地蔵３号墳、尾尻１号墳、名子古墳、色古墳（いずれも敦賀市）、浄土寺１号墳と、それぞれにとてもよく似た構造の横穴式石室を持つ古墳が一斉に造られます。敦賀半島の各地を結ぶ海上ルートを介在した古墳被葬者集団の活発な交流があったことを示しています。６世紀後半という時代の地域的なまとまりが横穴式石室の構造に表れていると言えましょう。

７世紀に入ると、敦賀半島を中心とする地域ではやはり似たような構造を持つ横穴式石室が造られ、さらに横穴式石室には石棚が架設されました。まるで地域の紐帯であったかのように石棚を架設するところに強い地域性を見ることができ、前時代との画期を考えることができます。

７世紀、若狭湾岸の古墳に埋葬された被葬者達は、津々浦々を結ぶ海上ルートで密接に交流し、古墳造りのみでなく、当然、土器製塩や漁業、海上渡航の技術や情報を共有した広い同一地域を形成した可能性は高いものと考えられます。その中でも、特に敦賀半島周辺には石棚の分布に見るようにさらに強い地域圏が存在したことは疑いないところです。

この背景に当時の政治的な意図を読み取ることも可能です。ヤマト王権の地域支配の一端を想定できるかも知れません。この地域への屯倉（ヤマト王権の直轄地）の設置とも無関係ではないものと考えられます。韓半島（朝鮮半島）への幾度の出兵が行われた７世紀の社会情勢を考えれば、ヤマト王権が各地の海浜集団、海部が備えていた土器製塩技術のみでなく、海上渡航技術にも着目したことは十分に考えられるところです。

浄土寺古墳群は、県内でも数少ない石棚が架設された古墳群として、また１古墳群内の複数の横穴式石室に石棚が架設された唯一の古墳群として、あるいは埋葬された集団の性格を知ることができる古墳群として重要であるだけでなく、敦賀半島周辺という小地域が古墳時代後期から古代律令制にどのような過程で引き継がれていくのかという実態を示す古墳群として重要なものと言えます。

2006（平成18）年３月現在、浄土寺２号墳、３号墳は調査を終え、再び深い眠りにつきました。古墳の墳丘は再び埋め戻され、横穴式石室は崩落を防ぐために土嚢で充填されて保存されています。石室や石棚は現地にそのまま遺されていますので、いつでも現地で石室を観察することができます。

浄土寺古墳群の発掘調査を契機として、歴史シンポジウム「浄土寺古墳群を考える」が2004（平成16）年11月28日に開催されました。美浜町内に在住する方々はもとより、美浜町外からも多くの歴史愛好者などがシンポジウムに参加されました。また、このシンポジウム前日に行われた浄土寺３号墳発掘調査現地説明会にも多くの方々に足をお運びいただきました。

浄土寺古墳群は、先人の努力によって幸いにも大きな開発事業が及ぶことなく、現状のまま保存され、地表面にその姿を残したまま今日まで伝えられてきました。浄土寺古墳群をめぐる今後の保存活用に対しまして、美浜町の皆様、そして歴史を愛好する美浜町内外の皆様方の暖かいご支援、ご協力をいただきますよう、お願い申し上げます。

●シンポジウムの様子

●浄土寺３号墳現地説明会の様子

●浄土寺２号墳の調査後

●浄土寺３号墳の調査後

埋蔵文化財周知パンフレット

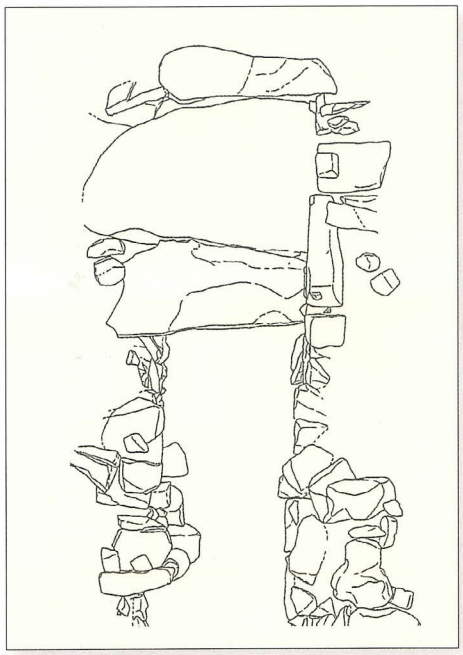
浄土寺古墳群

～敦賀半島周辺の石棚と海の民～

2006（平成18）年３月31日　発行

発行　美浜町・美浜町教育委員会
福井県三方郡美浜町郷市25-25

印刷　若越印刷株式会社
福井県敦賀市道口63-10-1



●浄土寺３号墳
石棚平面図（縮尺1/50）

このパンフレットは平成17年度国宝重要文化財等保存整備費（埋蔵文化財保存活用整備事業）補助金の交付を受けて作成しました。